

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520331

研究課題名(和文) 20世紀アイルランド小説におけるイースター蜂起の表象について

研究課題名(英文) Representation of the Easter Rising in Twentieth-century Irish novels

研究代表者

河原 真也 (Kawahara, Shinya)

西南学院大学・文学部・准教授

研究者番号：80454924

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀アイルランド小説において、英国支配からの脱却に大きく寄与することになった「イースター蜂起」(1916)がどのように表象され続けてきたのかを、社会史的、文化史的文脈から考察を加えた。1960年代以降、EUへの加盟、北アイルランド紛争、ケルティック・タイガー等の外的な要因が、作家による「過去」へのまなざしという点で変化をもたらし、同時に小説作品における「イースター蜂起」の表象も変化していったとの結論に至った。

研究成果の概要(英文)：A consideration of how the Easter Rising (1916) has been represented in Irish novels was undertaken in this study, based on the contexts of the cultural and social history in twentieth century Ireland. Some external factors such as gaining membership in the EU, the Troubles and Celtic Tiger may have greatly contributed to the depiction of the historic event in the works of Irish writers.

研究分野：英語圏文学

キーワード：アイルランド イースター蜂起

1. 研究開始当初の背景

「イースター蜂起」(1916)への評価は時代によって異なり、それは各時代のアイルランド社会の世情が如実に反映するものとなってきた。北アイルランド紛争が解決し、アイルランド研究において障害となっていた宗派対立という枠組みを超えて、過去を直視できる状況になった今、この歴史的大事件がアイルランド文学においてどのような意味をもつのか、冷静な立場で見つめることができる時期になったと言える。

一般的にこの歴史的大事件とアイルランド文学との関連で論じられたのは、演劇の分野であることが多かった。代表的なものとしては、Sean O'Casey の *The Plough and the Stars* (1926)が挙げられる。この作品における事件の描写に対して、痛烈な批判が投げかけられたが、自由国成立前後のアイルランドでは、この歴史的大事件を作家が自由に描くことは困難な環境にあったのである。

O'Casey のような演劇とは異なり、イースター蜂起を扱った小説はその数が限られる。Eimer O'Duffy の *The Wasted Island* (1919)が最初にこの事件を扱った作品とされるが、その後は陰をひそめ、Iris Murdoch による *The Red and Green* (1965)の登場を待たなければならない。蜂起 50 周年を迎えた 1966 年には大規模な祝賀行事が開催されたが、この時期は EEC への加盟など、国家の威信をようやく誇示できるようになった時期でもある。経済発展という外的要因と、小説における歴史の描写が密接に関わっているという点で、アイルランド人作家の過去にこだわる態度を検証する意義は大きい。このような意味で、20 世紀のアイルランド小説におけるイースター蜂起の表象こそ、未開拓の領域と言ってよい。

2. 研究の目的

20 世紀アイルランド小説において、英国支配からの脱却に大きく寄与することになったイースター蜂起(1916)がどのように表象され続けてきたのかを、社会史的、文化史的文脈から考察を加えることを本研究の目的とした。この歴史的大事件を経て、独立戦争、内戦、自由国成立、北アイルランド紛争、ケルティック・タイガー、不動産バブル崩壊と、20 世紀のアイルランド社会が経験した様々な出来事が、アイルランド小説の中でどのように描写されてきたのか、その変遷を精査しながら、国家の独立の精神的支柱となったイースター蜂起が、各時代においてどのように扱われてきたかを、定期刊行物などの客観的資料をもとに検証することとした。そして最終的にアイルランド人作家が、自分たちのアイデンティティと関わる「過去」をどのように作品において表現してきたかを、社会と小説の描写との関係を踏まえて、総括するに至った。

3. 研究の方法

イースター蜂起の表象の変遷を探るうえで、20 世紀をいくつかの区分にわけ、各時期の社会状況を検証し、そしてその時期の代表的な文学作品を検証した。それを受けて、(1)近年公開された軍事資料から明らかになったイースター蜂起の実態を歴史学の研究をもとに調査し、(2)新聞や雑誌などの一次資料からイースター蜂起に対する各時代の世論を探り、(3)イースター蜂起を扱った小説作品を読み解き、そして最終的に、(4)20 世紀のアイルランド小説においてイースター蜂起がどのように表象されてきたのか、各時代の世論の変遷と絡めて総括した。

4. 研究成果

研究を始めるにあたって、近年公開された軍事資料から明らかになりつつあるイースター蜂起の実態を歴史学の分野から精査することを主な作業とした。特に Charles Townsend の *Easter 1916: The Irish Rebellion* (2005)によって事件の概要をおさえられただけでなく、蜂起の指導者の一人で、独立後のアイルランド政治の中核にいたエイモン・デヴァレラ(元首相、大統領)の事件への関わりについて新たな事実を知ることが出来た意義は大きい。事実、この発見は、1960 年度以降のイースター蜂起の神格化という現象の陰の部分掘り起こすうえで非常に有益なものとなった。

アイルランドの大学入学資格試験である“Leaving Certificate”で課される中等教育用の歴史参考書の記述に基づき、イースター蜂起に関する教育現場における扱いを把握できたことも研究を遂行するうえで参考になった。というのも、これまでのアイルランド研究において主流であったナショナリストの視点にたった歴史認識を、歴史教科書の記述によって最小限にできたからである。

また、Field Day Group による *Revising Rising* (1991)は、ナショナリスト/ユニオニストという、イデオロギー対立に基づくイースター蜂起理解を整理できる貴重な文献であった。これによって、同じ年に起こった「ソムムの戦い」(1916)へのプロテスタント側の想いを理解できたことに加え、蜂起 100 周年行事へのプロテスタントの参加といった視点をも研究に取り入れることが可能となった。

20 世紀初頭から、50 周年行事が開催された 1966 年までの社会状況の検証も、小説を読み解くうえで欠かせない作業となった。James Stephen による *The Insurrection in Dublin* (1917)は、イースター蜂起のルポルタージュ的作品という点で、反乱直後のダブリンの様子を把握できただけでなく、*The Irish Times* などの定期刊行物による報道がいかなるものであったかの指針を与えてくれた。

最終年度は、20 世紀アイルランド小説におけるイースター蜂起の表象がどのように変化していったかを、時代背景に着目しながら

考察した。特に、独立前後の国家が混乱していた時期と、事件後 50 年が経過しアイルランド社会が大きく変革した 1960 年代以降との社会状況の比較を通して、事件への理解とその評価が大きく異なっていたことを確認し、それがどのように 60 年代以降の小説に反映されていたかを検証した。イースター蜂起の表象の変化を裏付ける事例としては、Diarmaid Ferriter が指摘しているように、独立後のアイルランドのアイデンティティ確立に大きな影響を与えたエイモン・デヴァレラの評価が 60 年代に大きく変わったことが挙げられる。彼はイースター蜂起指導者のうち、事件も唯一生き残った指導者（連隊の司令官）として、当時の社会においては神格化されていたのである。

現在、イースター蜂起 100 周年記念である 2016 年にむけて、多くの記念事業が計画されているが、「アイルランドの再ブランド化」（エンダ・ケニー首相）の一貫として、国内ではこの武装蜂起を再度神話化しようとしている点も見逃せない。これは IMF による公的資金がアイルランドに投与されるといふ最悪の経済状態において、国民意識が変化していたことが背景として考えられる。つまり、悪化した経済によって打ちひしがれた自信を回復されるため、過去の栄光に目を向けるという、20 世紀初頭の独立前後の時期と同じ構図がここに見いだされるのである。その構図を踏まえて、本研究は、アイルランド文芸復興期から自由国が成立し、共和国として完全に独立する時期に、文学作品に現れた現象と似たものが、現在においても起こっているとの結論へと導くに至った。

そして社会状況の変化に対応して、アイルランド作家が、この歴史的大事件の表象を意識的に変化させていったことは、これまでのナショナリスティックなアイルランド研究に対し、別の視点を提示するきっかけともなっている。例えば、それはケルティック・タイガーに代表される 1990 年代以降のアイルランドにおける経済状況の変化が、イングランドとの関係やカトリック教会に対するアイルランド人の態度が変容しているという事実にも反映していると言えよう。ナショナリスティックな立場に立つアイルランド文学研究者の視点が相変わらず変わっていないとの指摘もあるが、100 周年を迎える 2016 年に向けて、カトリック/プロテスタントという宗派対立を超えたイースター蜂起理解が進んでいる状況を我々研究者は声高に訴えていかねばならない。

本研究において、アイルランドのウェブサイト “Century Ireland” や “UCD Decade of Centenaries” など で発信される最新情報を活用できたことも、21 世紀のアイルランドにおける歴史認識を確認できたという意味で意義深い。それによって、これまで「他者」として排除されてきたアングロ・アイリッシュ (Anglo-Irish) の立場からの視点をも確保で

き、最終的に新しい視点から、アイルランド文学におけるイースター蜂起の表象がもつ意味を総括できたのではないだろうか。

具体的な研究成果としては、イースター蜂起の表象変化の検証作業を通して、1960 年代のアイルランド社会の重要性を再認識し、その時代にデビューし、60 年代社会が色濃く反映した作品を生み出した Edna O'Brien や John McGahern などのアイルランド小説研究へと視野が拡大したことが副次的な産物と言えよう。

また、福岡を拠点とする民間のアイルランド友好団体「ケルト協会」において、二度にわたってイースター蜂起に関するセミナー講師を務め、九州からアイルランドに関する事柄を発信できたことも収穫であった。セミナー参加者からの、素朴な質問やコメントが、研究を遂行するうえでどれだけ有益であったかは筆舌に尽くしがたい。

最後に、本研究期間内にイースター蜂起へのアイルランドにおける認識の変化を探る行程で、アイルランド研究における「階級問題」の欠如といった現象を再確認できたことも成果の一つである。この問題提起は、2015 年から 2018 年までの科研費獲得によって本格的に研究することが可能になったことを付記しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 3 件)

河原 真也、イースター蜂起再検証、日本ケルト学会九州支部、西南学院大学、2013/03/30

河原 真也、イースター蜂起とアイルランドの文化ナショナリズム、九州 E U 研究会、西南学院大学、2014/03/06

河原 真也、カトリック・インテリゲンチヤの台頭と近代性への目覚め、日本ジェイムズ・ジョイス協会、法政大学、2014/6/14.

〔図書〕(計 2 件)

河原 真也、ジョン・ミリントン・シングの描く異界 文化ナショナリズムと「西部」という名の亡霊(『亡霊のイギリス文学 豊饒なる空間』富士川義之、結城英雄編) 国文社、219-231 頁、2012 年 8 月.

河原 真也、カトリック教会に挑んだ「西部」の女 『カントリー・ガール』と 1960 年代のアイルランド社会(木村正俊編『アイルランド文学 その伝統と遺産』) 開文社出版、490 - 508 頁、2014/6.

〔その他〕

招待講演(計 2 件)

河原 真也、イースター蜂起とアイルランド人作家、日本ケルト協会ケルトセミナー、西南学院大学コミュニティセンター、2013/6/9 .

河原 真也、イースター蜂起とアイルランド独立、日本ケルト協会サロンセミナー、アクロス福岡、2014/9/20.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

河原 真也 (KAWAHARA, Shinya)

研究者番号： 80454924